

2025 年 8 月 3 日 説教「狼の中の小羊」

ルカの福音書 10 章 1～16 節

エルサレムへの道を進まれた主は、従うと言いながら弁解をする者たちに、「人の子には枕する所もない」と言われたのでした。

1. 宣教派遣 (1～4 節)

—①七十人を定め (1)「その後、主は、別に七十人を定め、ご自分が行くつもりのすべての町や村へ、ふたりずつ先にお遣わしになった。」

主イエスに選ばれた 12 人の弟子達には力と権威を授けて、宣教に派遣されたことがありました(9 章)。今ここに、70 人の弟子達を定めて(出エジプト 24:1 参照)、これから向かう予定の町や村に、お遣わしになっています。また、働きを補い合える二人を組にして送っておられます。

②実りは多いが (2)「そして、彼らに言われた。『実りは多いが、働き手が少ない。だから、収穫の主に、収穫のために働き手を送ってくださるよう祈りなさい。』」

ここで主は宣教の結実であるクリスチャンを自然の実りにたとえています。そして、働き人がなすのは宣教結実の収穫だということです。そして、その働き人は今なお少なく、さらに起こされるように祈れとも言われました。

③財布も袋も持たずに (3～4)「『さあ、行きなさい。いいですか。わたしがあなたがたを遣わすのは、狼の中に小羊を送り出すようなものです。財布も旅行袋も持たず、くつもはかずに行きなさい。だれにも、道であいさつしてはいけません。』」

財布も旅行袋は持たず、靴もはかずに信仰一本で行けと言われるのです(9:2 参照)。彼らを派遣するのは、羊のような弱い存在を狼のような世俗の中に送りだすようだとされます。ここで、道で挨拶をするなど言われているのは、安易に彼らの懐の中に入るなという意味です。

2. 神の国を伝える (5～9 節)

①平安があるように (5～6)「『どんな家に入っても、まず、《この家に平安があるように》と言いなさい。もしそこに平安の子がいたら、あなたがたの祈った平安は、その上にとどまります。だが、もしないなら、その平安はあなたがたに返って来ます。』」

家庭に訪問伝道する時には、この家に平安があるようにと述べ、もしそれに応じてキリストに心を向ける人があるならば、その家の人には主の平安が備えられると言われます。一方、福音に興味を持たないのであれば、その家には主の平安はとどまることがないと言われます。

②神の国を言い広めなさい (7～8)「『その家に泊まっていて、出してくれる物を飲み食いしなさい。働く者が報酬を受けるのは、当然だからです。家から家へと渡り歩いてはいけません。どの町に入っても、あなたがたを受け入れてくれたら、出される物を食べなさい。』」

ここでは福音伝道者が受け入れられ、食事を勧められるなら、それを遠慮なくいただいて良いと言われます。伝道者の報酬が正当であると述べら

れます。そして、家から家へと渡り歩くのではなく、受容してくれる家があれば、食事をするほどに親しくなって、御言葉を深く伝えるべきであることを示唆されます。

③神の国は近づいた (9)「『そして、その町の病人を直し、彼らに、**《神の国が、あなたがたに近づいた》**と言いなさい。』」

その町に病人がいるならば、その病をキリストの権威によって癒し、人々には、神の国が近づいた、と宣言せよと言うのです。バプテスマのヨハネは「天の御国が近づいたから、悔改めなさい」(マタイ 3:2)と訴えましたが、ここでも信仰の促しが勧められています。

3. 主を受け入れない町へのさばき (10～16 節)

①町のちりをぬぐい (10～11)「『しかし、町に入っても、人々があなたがたを受け入れないならば、大通りに出て、こう言いなさい。『**私たちは足についたこの町のちりも、あなたがたにぬぐい捨てて行きます。しかし、神の国が近づいたことは承知していなさい。**』』」

しかし、福音を受け入れない町には、足についた町のちりを捨てていきなさいと言われます。これは彼らに対する抗議のしるしと言えます(9:5 参照)。その町の人に、神の国が近づいたことをはっきりと知らせなさいとも言われました。つまりは、メシヤ(救い主)が来られたことは、また主のご審判が近づいたことでもあることを伝えよというのです。

②ソドムのほうが (12～14)「『あなたがたに言うが、その日には、その町よりもソドムのほうがまだ罰が軽いのです。ああコラジン。ああベッサイダ。おまえたちの間に起こった力あるわざが、もしもツロとシドンでなされたのだったら、彼らはとうの昔に荒布をまとい、灰の中にすわって、悔改めていただろう。しかしさばきの日には、そのツロとシドンのほうが、またおまえたちより罰が軽いのだ。』」

福音を否定する者たちについては、ソドム(創世記 19 章参照)より重い罰を受けるというのです。それらの町とは、コラジン(ガリラヤ湖北部)、ベッサイダ(ガリラヤ湖北東部)。彼らがたいなる主のわざがなされても、悔改めることがないのなら、異邦人の町であるツロやシドンのまだ罪が軽いという厳しいお言葉です。

③ハデスまで (15～16)「『**カペナウム。どうしておまえが天に上げられることがありえよう。ハデスまで落とされるのだ。あなたがたに耳を傾ける者は、わたしに耳を傾ける者であり、あなたがたを拒む者は、わたしを拒む者です。わたしを拒む者は、わたしを遣わされた方を拒む者です。**』」

また、ガリラヤ湖に近い大きな町カペナウム。経済の要衝でもあったこの町は今や、キリストの言葉に背を向けているのです。その町はハデスに落とされるというのです。遣わされた伝道者達の語ることに耳を傾ける者はキリストに耳を傾けることになり、キリストを拒む者は父なる神を拒むことになると言われたのです。

《結論》9 章においては、イエス・キリストは従うことについて語られました。10 章に入って、12 弟子たちに続く、70 名の者たちが宣教へ派遣されました。今朝も三つのポイントで学びましょう。

第一に「平安があるように」というメッセージについてです。

「平安」は元の言葉(ギリシャ語)ではエイレイネです。この言葉はヘブル語ではシャロームです。いずれも平和とも訳せます。ヘブル語ではシャロームは祝福の言葉です。たとえば、復活のイエスは弟子達の前に現れて、「平安があなたがたにあるように」(ヨハネ 20:19, 21)と言われています。シャロームはまた日常的な挨拶にも使われます。しかし、ここで与えられる平安は単に地上的な平安や平和ではありません。「わたしはあなたがたにわたしの平安を与えます。わたしが与えるのは、世が与えるのとは違います。」(ヨハネ 14:27)とある通りです。この平安があるようにと、町に入ったら告げなさいと言われたのです。私どもも、聖霊が送ってくださるこの平安を与えていただきたいのです。その平安は、さまざまな思い煩いなどに苦しめられている私たちに、天的なもたらすのです。地上の人間関係、国際関係にもこの平和が与えられるよう祈っていきましょう。

第二には「神の国は近づいた」というメッセージについてです。

「神の国」とはメシヤ(救い主)の支配という意味です。救い主であるイエス・キリストが来臨されて御愛を現わし、ついには十字架の究極の愛により人間の罪を贖い、復活されるという出来事はすでに起こり実行されようとしているというメッセージであります。また、救い主は終わりの日に再び来られて、ご審判をなさるのです。今朝の聖書記事では、伝道者が語り告げることを受け入れる者にも、また救い主を拒む者たちにも、「神の国は近づいた」と告げなさいとイエスは教えられます。このお言葉は「悔改めなさい」が同時に響いてくる言葉です。私たちもイエス・キリストのお言葉を改めて受け止めて、罪の悔い改めをして聖餐式に臨んでいきましょう。

第三には狼の中に送られる小羊についてです。

狼は小羊と出会えば、襲うでしょう。小羊は狼に狙われればひとたまりもありません。なにしろ小羊は大変に弱い存在だからです。イエスが伝道者を世に遣わすにあたって、彼らはとても弱い存在であると見ておられました。体力的には屈強な人もいたでしょう。しかし、霊的にはどう見ても弱かったのです。なにしろ、世の中には様々な思想や考えが渦巻いているのです。また、様々な誘惑があります。お金の誘惑、性の誘惑、犯罪、嘘、偽り…。上げたらきりがありません。いかにも狼のような恰好をしていれば、警戒もするでしょう。しかし、巧みにキリストから引き離すような相手に遭遇してしまえばひとたまりもありません。私たちも同じです。悪魔はインターネットなどを通して攻撃してきます。イエスはそのような私たちを心配してくださっているのです。そして狼ならぬサタンの罠にはまらないために、信仰によって歩むことを教えられるのです。守られるように祈り合っていきましょう。